

永き災厄がラヴァスタ教国を襲った時——七人の勇気ある者が立ち上がった。永き災厄を封印した七人は聖騎士として崇められた。聖騎士の子孫——信仰心の厚いマクアダムズ家、武芸に秀でていたニルスト家、高い叡智を持つアーノルド家、潤沢な資金を持っていたオルトロス家、慈悲深いアーヴァン家、魔術に優れたエディフィス家、人心掌握に長けたネイザン家は今日に至るまで、教皇の統治を助けている。

*

聖都フィリスにあるエルフェン学院は、身分関係なく優れた学力を有する者が入学できる。どのような出自でも入学が許される反面、その倍率は恐ろしいもので、この学院には国有数の優秀な学徒が集っている。

テリオルはエルフェン学院に勤める学者だ。肩のあたりまで伸ばされた絹のようなきめ細かな小麦色の髪と青い瞳。人より高い背に、伶俐な目元と通った鼻筋。七聖騎士の一人アーノルド家当主の長子という異質な出自だけでなく、彼は美しい容姿から学院の中でも一際目立っていた。

その日もテリオルは教え子たちに講義を行っていた。生徒たちは熱心に講義に集中しており、テリオルの声だけが響いている。

静寂を破ったのは、けたたましい足音だった。

生徒もテリオルも何事かと足音がする方を見ると、後ろの扉から豪華な刺繍がされた白い装束を着た男が三人、不躰に入ってきた。神官だ。

神官は生徒たちには目もくれず、真っ直ぐにテリオルの方へ向かってきた。

「テリオル、アーノルドだな？」

神官の詰問するような聞き方に、テリオルは警戒しながら頷いた。

「テリオルは私だが」

目の前にいる男が標的の人物だと分かると、神官は巻紙を取り出し懇懃に告げた。

「テリオル、アーノルド、貴様を刑法第三十条に背いた疑いで捕縛する！」

「え？！」

反論する間もなく、二人の神官はテリオルの両腕を掴んだ。

自分の身に何が起きているのか実感がわからず、教え子たちの驚いた声が、遠くから聞こえてくるような気がした。

「待ってくれ！」

神官がテレポートの詠唱を始めた時、ようやく事態が飲み込めてきた。

「私のどの行動が、経典の教えに触れたのだ？」

詠唱を止めた神官は、侮蔑するような視線を向けた。

「言い訳は裁きの間で聞く」

なおもテリオルが抵抗しようとする、腕を掴んでいた神官が背中を小突いた。

「大人しくしろ！」

自分より下位の神官に小突かれた衝撃のあまり、テリオルは動けなくなってしまう。指揮を執っていた神官の詠唱が終わると、テリオルは暗い石畳と牢獄が広がる場所に立っていた。

「ここは……もしかしてパルテール監獄か？」

テリオルの腕を掴んでいた神官が頷く。

「そうだ」

パルテール監獄は、重罪を犯した貴族専用の監獄だ。

別名帰らずの監獄と呼ばれている。この監獄に入れられた者は、死罪に処せられるか貴族の身分を剝奪され、二度と貴族として生きていくことができないことから、そう呼ばれている。

牢に入れられる直前、テリオルは携えていた剣を没収された。

閉められる牢の扉が、まるでテリオルの人生が終わ

ったことを表しているように思えた。ラヴァスタ教国では、法は教義をもとに作られている。刑法三十条と云えば、最も重罪を犯した者に対する刑罰が載っている。それを犯した者は、身分に関係なく死罪が言い渡される。この国で最も重い罪は、教義に懐疑心を抱き教えに背くことだ。

テリオルは全身の力が抜けていくのを感じ、鉄格子を掴んで膝をついた。

グローブをしているのに、血の気が引いていくように指先が冷えてきた。恐怖のあまり、鼓動が速くなり、息が上手く吸えない。

何故自分が。何かの間違いではないか。思考を停止しかけている頭を必死に動かし、テリオルは最近の自分の言動を振り返った。

ふいに、ある学生の顔が脳裏に浮かんだ。その瞬間、自分が牢に入れられた理由が分かった気がして、テリオルは息を呑んだ。

数年に一度、平民だがエルフェン学院に入学してくる天才が現れる。トゥーロンはその天才の中でも、学費が免除になる特待生だった。平民で特待生に選ばれるのは百年に一度あるかないかほど珍しいことだ。

元々天才だっただけでなく、トゥーロンは努力も人一倍する学生で、学者たちもトゥーロンのことを可愛がっていた。

トゥーロンは、十日ほど前に神託によって「平和の供物」に選ばれた。

七聖騎士が封印した魔王——永き災厄が、復活したと言われて百年余り。その間、災厄から民を守るために、神託によって主に供物を捧げてきた。

「待て、本当に供物が必要なのか？ 本当にトゥーロンではないと駄目なのか？」

自分はアーノルド家の人間だから大丈夫、という思いがあったのかもしれない。誰も何も言わない中、テリオルだけが神官に歯向かった。

「先生……主は何故、僕を選んだのでしょうか？」

連れていかれる直前の、全てを諦めたかのような、悲しくて堪らないトゥーロンの顔が今でも脳裏に焼き付いている。

おそらく、あの時神官に異議を申し立てたことによつて、教えに背く者と判断されたのだろう。

しかし、自分は教義に疑問を抱いてはないし、ただ教えを救いたいと思つて行動しただけだ。——それだけで死罪になるのだろうか。

処暑の月とはいえ隙間風が吹いてくるせいか、肌寒い。牢の中には、藁が敷かれている。テリオルは藁の上に座り込むと、小汚い薄っぺらな毛布を羽織った。毛布と、隅々まで細かい刺繍が入っている、手の込んだ高価な衣服との対比が恐ろしいほどだ。

テリオルは毛布を握りしめながら、これからどうするべきか考えを巡らせていた。

日が沈み始めた頃、神官が牢の前に来た。

「貴様の裁きは明日の十時から行う」

黙っているテリオルを気にする素振りも見せず、神官はそれだけ告げると、監獄を後にした。

十年ほど前に廃嫡されたとはいえ、テリオルは七聖騎士の長子だ。おそらく、審判者の席には七聖騎士の一人、イシユカルドⅡアーヴァンが座るだろう。

明かりは牢の外に掲げられた燭台だけだ。ぼんやりとした明かりを頼りに冷め切ったスープをすすする。食欲などなかったが、何か口にすれば少しは落ち着けるかもしれない。スープは野菜のかけらが浮いている味のしないものだ。不安のあまり味を感じないのか味が薄いのかは分からない。

硬いパンを食べていると、牢番が声をかけてきた。

「牢の食事は不味いだろうか？」

「……そうだな」

何故牢番が声をかけてきたのか考えながら、テリオルは答えた。

「お前が金をくれたら、もっと豪華な食事を用意してやるぞ」

「断る。どうせこんな場所じゃ、どんなに立派な食事で

も不味くなるだろう」

牢番はなおも引き下がらなかつた。

「それなら毛布をもつと用意してやろう。どうせ、お前は死罪になるんだ、金を出し渋るなよ」

牢番の無礼な物言いにも、テリオルは感情を露にしなかつた。

「言葉には気を付けたまえ。私はまだ裁きを受けていない。まだ有罪か冤罪かどうか決まっていないうぞ」

テリオルが冷静なのをいいことに、牢番は無礼な物言いを改めなかつた。

「意地を張るのは止めた方がよいぞ。三十条を犯した者が無罪放免された例などあるはずがない」

テリオルはそれ以上何も言わなかつた。

不味い食事でも、腹に何か入ったおかげか、思考が定まってきた。何もせず処刑台に送られるわけにはいかない。家族に手紙を書かなくては。

「毛布も立派な食事もないから、羊皮紙とペンと燭台を貸してくれ」

「十ファイル」

テリオルは財布から五十ファイル硬貨を取り出した。

「釣りは取っておきたまえ」

牢番が持ってきた羊皮紙にペンを走らせる。推測だが自分が捕らえられた理由、迷惑をかけたことへの謝罪を綴った。廃嫡されてから家族と顔を合わせる機会もめつ

きり減ってしまった。母は心からテリオルの身に降りかかつた不幸を悲しむだろうが、父はどうだろうか。神託一つでテリオルを廃嫡にした父。当主である父は、何よりも家のことを第一に考えている。変にテリオルが生き延びることよりも、死罪になってしまった方が、都合が良いと思うかもしれない。

妹と弟宛への手紙を書いてる途中で、甥や姪が冷遇されないか不安になり、妹の嫁ぎ先と弟の妻の実家宛の手紙も書いた。

結局昨夜はほとんど眠れなかつた。

裁きの間で一番高い席、審判者の椅子に座るのは七聖騎士の一人最高審判者イシュカルドⅡアーヴァンだ。手縄をかけられている姿を知り合いに見られるのは、惨めだった。思わず俯いてしまいたいようになる自分を、テリオルは必死に鼓舞した。恥ずかしがるようなことは、何一つしていかないじゃないか。

イシュカルドは温和な顔立ちとは裏腹に、厳格な性格で有名だ。イシュカルドは罪人を見下ろした。

「まさか、アーノルド殿の長子を裁く時が来るとは……」

審判者は嘆かわしそうに首を振った。

「貴殿のご先祖も嘆いているだろう」

テリオルは毅然と言い張った。

「イシュカルド殿。私は無実です」

「無実？」

イシュカルドは厳しい声で罪人を非難した。

「さらに罪を重ねるのか、テリオル。貴様の罪の証拠もあがっている」

審判補助官が、羊皮紙をイシュカルドに渡した。

「そなたが、供物を差し出すことに異議申し立てをしたという証言がいくつかあがっている。間違いは無いな？」

「はい」

テリオルは、今度は否定しなかった。やはり、あの行動のせいで背教者とみなされたのだ。

「ならば、罪を認めたらどうだ？」

テリオルは審判者を見据えた。

「ですが、教えを非難した訳ではありません」

「……主はやはり常に正しい。そなたを廃嫡すべきという神託は、誤りでなかったと証明されたのだから」

テリオルは険しい顔のまま、何も言わなかった。

テリオルはますます惨めになった。テリオルが廃嫡されたのは、ヴィクトリカ学院を不合格になった直後だった。

イシュカルドは吐き捨てるように言った。

「反省の色も見えぬ。アーノルド殿の子息であることに変わりはない、少しは温情を与えようと思った私が愚かだったな」

イシュカルドは冷酷に告げた。

「償い人として、永き災厄を討伐することに命を懸けよ」

「償い人……？」

驚きと怒りのあまり、呟いた声が震えた。

七聖騎士が封印したといわれる「永き災厄」が復活したと言われて百年余り経つ。その間、罪人のうち一部の者は償い人として「永き災厄」の討伐を命じられてきた。しかし、未だに償い人たちは誰も災厄を倒すことができないでいる。しかも、いつ命を落とすか分からない旅に生涯を懸けるのだ。——つまり、体のいい死罪ということだ。

今すぐ命を奪われることは免れたが、それでも罪人になったという事実は消えない。

「イシュカルド殿！ 私は無実です」

聖騎士は、虫けらを見るような冷ややかな視線を、哀れな学者に向けた。自分の罪を認めない極悪人の言葉など、聞くに値しない。

「私の裁きが不服か。今すぐ処刑台へ送ってもよいのだぞ」

テリオルは口をつぐむしかなかった。これ以上自分の無罪を主張することはできないが、他者へ迷惑をかけるのは、可能な限り抑えたい。

「学院長を監督不行き届きで処罰するのは止めてください。家族も私の行動とは一切関係ありません。処罰する

のは、私だけにしてください」

「償い人は、貴様以外にもいる。その者たちと合流したら、すぐさまここを発て」

イシユカルドはテリオルの願いに答えることなく吐き捨てた。

裁きの間から出ると、手縄が解かれた。ややあつて剣も返された。

「しばらくここで待て。すぐに、償い人に雇われている傭兵が来るはずだ」

神官は続けて言った。

「そいつと合流したら、夕刻までに聖都を離れる。さもなくば、街の者たちに貴様の殺生を委ねさせる」

次から次へと残酷な仕打ちが告げられ、悔しさがこみ上げるよりも、呆然としてしまった。

家族は大丈夫だろうか。学院や同僚たちにも危害が及ばないだろうか。抑えようとしても、不安は次から次へと襲ってくる。

しばらくすると、二十代前半だろうか、テリオルよりも若そうな、槍を持った青年が神官に連れられてきた。黒い髪に濃紺の服のせいにか、この白い空間では、場違いな異質な存在に見える。

「今度の仲間はコイツか」

青年は無遠慮な視線を向けた。青年の無礼な言動に腹

を立てる気力もなかった。

傍らにいた神官が頷く。

「そうだ」

「お前、剣が使えるのか？」

「ああ。剣術なら習ったことがある」

「そりゃあ助かった」

テリオルのぶつきらぼうな言い方に気にした素振りも見せず、青年は右手を差し出してきた。

「俺はディケンズ。償い人に雇われている傭兵だ」

テリオルは険しい顔のまま、握手をした。

「テリオルⅡアーノルド」

手を放しながら、ディケンズは厳しい顔で言った。

「良いか、これからは誰もお前のことを貴族だとは思わない。姓を名乗るのはお前の自由だが、あくまで目的で旅をする同行者として接するからな。償い人になつた以上、過去は忘れる。俺たちもお前の過去には干渉しない」

テリオルは唇を噛んだ。そうでもしないと、心の底から湧き上がってくる、身悶えするほどの悔しさを抑えられない。罪人として生きていかなくはならないこと、アーノルド家の人間としての誇りが踏みにじられていく事実が、改めて身に染み込んだ。

「ついてこい」

ディケンズはそう言うと、足早に歩き出した。

「急いで旅支度をするぞ。今日中に街の外にいる他の仲間たちと合流する」

「他の者は何で街に入らないんだ？」

「デイケンズは呆れたように冷たい視線を向けた。

「ここは聖都だぞ？ 教団のお膝元では、償い人の一行の特徴なんて知れ渡っている。……罪人に優しい街があるか？」

テリオルは何も言えなかった。自分が罪人として世間から忌み嫌われる存在になっているという事実が、胸を締め付けた。これから先、自分が遭遇するであろう困難が次々と頭に浮かんでくる。

外に出ると、テリオルは思わず足を止めた。

「ゴート」

上級法院の前に、初老の男が立っていた。執事のゴートⅡカスパロフだ。

「テリオル様」

ゴートは深々と頭を下げた。

「……裁きの結果を、使いにやったクリティウスから聞きました。ご無事を祈っております」

「今まで世話になったな、ありがとう」

ゴートは首を振った。

「滅相もございません」

それから忠実な執事は、鞆をテリオルに渡した。

「荷物はまとめてあります。旅先で必要そうな物は一通

り入れておきました」

鞆には魔法が使われており、数量に限りはあるが、鞆より大きい物や重い物を入れても重量を感じることなく、かさばることもない。

「有能な家臣だな」

デイケンズの声には、素直に感嘆する気持ちがこもっていた。

「貴方が一緒に旅をされる方ですか？ テリオル様をよろしくお願いいたします」

「仲間に貴賤は関係ない。あくまで、コイツは貴族ではなく同じ目的の仲間として接する」

主人を「コイツ」呼ばわりされたことに腹を立てていることが、テリオルには分かった。ゴートは感情を表に出すことは滅多にないが、何年も一緒に過ごしているうちに、微かな表情の変化でゴートの感情を読み取れるようになった。

「荷物ありがとう」

テリオルはわざと明るい声で言った。

「父上と母上……それにニルヴァーシユとオルテンシアにも申し訳ないと伝えておいてくれ」

「しかと伝えておきます」

それから、ふと心残りのことをもう一つ思い出した。

「私の部屋に書きかけの論文があるはずだ。可能ならば、誰かに引き継いでもらいたい——罪人の論文を世に出せ

るのであれば」

「はい」

本当はここを離れたくない。しかし、夕刻までに聖都を離れなければならぬ。ディケンズは少し離れた場所で、興味なさげに佇んでいる。早く出発するべきだろう。「私はもう行くよ。本当に今までありがとう」

言っている途中で、どうしようもないほどの哀しみが込み上げてきた。これで本当に、最後の別れになるだろう。

「他の者たちも皆、テリオル様に別れを告げたかったのですが、人目に付きませぬので、私だけ参りました。――誰か別れを告げたい者はいませぬか？」

テリオルは首を振った。自分の屋敷や学院に行つてしまつたら、二度と聖都を離れることができないような気がした。

テリオルは執事の手を固く握つた。ゴートの目に微かに潤んでいるのを見た時、視界がぼやけて、慌ててテリオルは視線を落とした。

聖都を離れたくないという思いが、足を鉛のように重くさせている。

テリオルは聖都の街並みを、目に焼き付けるように見渡した。整備された石畳と精巧なレンガ造りの家々。細部まできめ細やかに作られたステンドグラスや彫刻が施

された聖堂。上の方だけだが、エルフェン学院も見える。

「仲間たちはどこで待っているんだ？」

「静寂の森で待っているはずだ」

静寂の森は聖都の南方に位置している。

城門をくぐると、聖都を振り返った。――もう二度と、自分は聖都に入ることができない。

しばらく足を止めていたが、テリオルは前を向くと、先を歩く仲間の方へ小走りに駆けていった。

静寂の森はその名の通り、風で木々が枝を揺らす音や、鳥のさえずりしか聞こえない。

「この辺りで待機していたはずだ」

少し開けた場所に出ると、前方に人影が見えた。

「あれが仲間だ」

女性が二人と、男性が一人だ。

仲間たちと会話ができるほどの距離まで来ると、ディケンズはテリオルを紹介した。

「新しい仲間だ」

「テリオルだ。よろしく」

テリオルは姓を名乗らなかつた。

金髪の髪を団子状に結び上げた娘と目が合う。まだ二十歳前後に見える若い娘だ。

「レフィーネです」

娘は剣を腰に携えている。彼女の可愛らしい顔からは、

剣を振るう姿が想像できない。

「まさか、君のようなお嬢さんが剣を振るうのかい？」

テリオルの言葉に腹を立てた様子もなく、娘は明るく笑った。

「ええ。安心して、とりあえず足手まといにはなつてないはずだよ」

レフィーネの言葉が嘘ではないことは、周囲にいる仲間たちの反応で分かった。

「失礼。気分を害したなら許してほしい。よろしく」

「よろしくお願いします」

それから、テリオルはレフィーネの後ろに隠れるように立っている女性に視線を移した。

テリオルの視線に気づいてか、女性がおもむろに顔を上げた。

愁い気な瞳の美しい女性だ。平民にしては、仕立ての良い服を着ている。

「アリアナです」

「……！」

名前を聞いた瞬間、テリオルの脳裏に少女の顔が浮かんだ。テリオルは、目の前にいる女性を知っている。

「君は……」

女性は薄く笑った。昔と比べて、大人の気品が溢れている。確か、テリオルの五歳年下のはずだから、二十六年になるはずだ。

「お久しぶり、テリオルさん」

デイケンズはテリオルと女性を交互に見た。

「ここに来る前の知り合いか？」

「ええ」

デイケンズや他の仲間たちは、目の前の女性——アリアナ——カサグランデー——結婚してバルバトス姓になっていたはず——の出自を知っているのだろうか。

「アリアナ、君ももしかして……」

「あら、知らなかったんですの？ 少し前に償い人になったんです」

廃嫡されてから、テリオルは社交場からも遠のいており、知り合いたちの近況を知らない。

テリオルの胸の中に苦いものが広がった。自分がよく知っている者が、罪人になっていたことが悲しかった。

「そうか。——私もだよ」

「これからよろしくお願いします」

アリアナとの挨拶が終わるとすぐ、矢筒を背負った男性が右手を差し出してきた。射手らしく、親指から中指まで覆われたグローブを着けている。目元に小皺があるところを見ると、おそらく四十歳前後だろう。

「リチャードだ。よろしく、テリオル」

テリオルも手を握り返した。物静かそうな男性だが、どこぞの不愛想な傭兵と比べると社交的な性格のようだ。

「よろしくリチャード」

「自己紹介も終わったな。じゃあ、出発するぞ」

「ディケンズが何の気もなしに言った。」

「次の目的地はどこなんだ？」

「テリオルの問いにはリチャードが答えた。」

「フェアドルだ」

「何故フェアドルなのか尋ねても？」

「七聖騎士が災厄を討伐したときと同じ場所に魔物が出現しているからです」

「災厄が復活したと同時に、魔物も現れ始めたと言われている。七聖騎士の家に生まれた者は、言葉を話せないうちから七聖騎士の物語を聞かされる。テリオルも、全て諳んじれるほど七聖騎士の伝説は聞かされてきた。確かに、現在で言うフェアドルにも魔物が出現していたはずだ。」

仲間たちはテリオルのことを特別扱いしなかった。焚火の枝や街で売る用の素材集め、夜の見張りなど、皆と同じように仕事を割り振られた。今まで執事たちに身の回りの世話をしてもらっていた身としては、初めての経験ばかりで苦勞もしたが、仲間たちとの間に変な壁を作られるより良かった。この旅で生き残るためには、仲間と良い関係を築くことが重要のはずだ。

今夜は、ディケンズと見張り番をすることになった。

捕縛されてから十分な睡眠はとれていないが、今夜も眠れそうにない。

「……」

「ディケンズは口数が少ないせいとか、重い雰囲気か漂う。」

「君は、償い人ではないのかい？」

「ディケンズはテリオルを一瞥すると、すぐに焚火に視線を戻した。」

「そうだ。あくまで雇われて旅をしている」

「だから聖都にも入れたのか」

「ディケンズは何も言わずに頷いた。」

「テリオルが話を続けようと口を開きかけた時、青色の暗い瞳と目が合った。」

「あまり人のことを聞くんじゃない」

「じゃあ、私の話を聞いてくれないか？」

「……」

「私は無実だ」

「ディケンズの返答を聞く前に、言葉が口から溢れ出していた。正直、今でも悪い夢をみているのではないかと思う。教え子を助けようとしただけで、罪人にされるなどおかしな話だ。」

「お前がそう言うなら、そうなんだろうな」

「ディケンズの言葉に、テリオルは驚いて次の言葉を継げなかった。」

「裁きを神託とやらで行うなんざ、馬鹿げている」

「……君は背教者か？」

「デイクENZは鼻で笑った。」

「そういうお前は、濡れ衣を着せられたのに教えを信仰しているのか？」

正直なところ、テリオルは、自分が神を信じているのか分からなかった。自分が神託によつて廃嫡になった時から、神の意向に疑問を抱くようにはなつていたかもしれない。

「償い人だと街の人に気づかれたことは？」

テリオルは答える代わりに、話題を変えるための問いを投げかけた。

「一回ある。隣町のハーバルでな。……気づかれたら、あつという間に街を出ていかざるを得なかった」

火がはじける音が響く。焚火が若い青年の顔を照らしている。

「悪意を前面に出す奴はまだいい。それよりも何も言わずに遠巻きに俺たちに侮蔑の視線を送ってきていた奴らの方が恐ろしかった。人は、あれほど残酷な目をすることができるんだな」

デイクENZの目には怒りよりも、深い哀しみが宿っていた。

デイクENZは姿勢を変えると、呟いた。

「魔物よりも、偏見の方が恐ろしいものだ」

まるで独り言のような言い方だった。

「そういえば、何故神官は君たち一行の居場所を知っていたんだ？」

デイクENZは頷いた。

「そうだな。お前も知つておいた方が良い話だろう。教団からの指示で、定期的に俺たちの居場所を手紙で報告しているんだ」

テリオルは顔を強張らせた。

「何故そんなことを」

「俺だつてそんなことはしたくない。報告を途絶えさせたら、国中に俺たち一行のことを通達すると脅されていくんだよ」

国中に自分たちが償い人だと知れ渡る。それは、二度と街に入れなくなることを意味している。

テリオルはそれ以上話をする気分になれず、押し黙った。

ふと、テリオルは眠っている仲間たちに視線を移した。アリアナは何の罪で裁かれたのだろう。アリアナは本当に罪を犯したのだろうか。アリアナに最後に会ったのは、彼女が成人する前だ。十年以上の年月が経つことから、人となりが変わってしまったとしても、おかしくない。

火がはじける音だけがする中、夜は更けていった。

*

宰相のノルデイスⅡネイザンが評議場に着いた時には、まだ定刻ではなかったが、教皇と他の七聖騎士は揃っていた。

「いやはや、遅れて申し訳ありません」

「大丈夫ですよ、まだ定刻ではありませんし」

そう声をかけてきたのは、司教のミシエラⅡマクアダムズだ。ミシエラは成人したばかりの十代の娘だが、マクアダムズ家当主として司教を務めている。

「全員揃ったことだ、これより評議会を始める」

教皇が号令をかけるとすぐに、仕立ての良いローブに身を包んだ険しい顔立ちの男が立ち上がった。

「皆様、此度は愚息が申し訳ありませんでした」

そう言うって頭を下げたのは、最高学匠のベネフィスⅡアーノルドだ。ベネフィスは学匠というより武人のような厳つい顔つきをしている。彼の長子を見たことがある者は、テリオルが母親に似たことを瞬時に理解する。

「テリオルを廃嫡されていたのは不幸中の幸いでしたな。廃嫡してなければ、貴殿も無事ではなかったでしょう」

財務卿のフェロセンⅡオルトロスが薄く笑った。三十をいくつか越えた男だが、甘いマスクと記憶に残りやすい美しい声で女性たちから羨望の眼差しを向けられている。

「さすがは主ですね。こうなることを見越して教示をし

たに違いありません」

「いやはや、御父上のサフィロス殿は偉業を成し遂げましたな」

感嘆するように呟くミシエラに続いて、軍務卿カタストルⅡニルストが口を開いた。武芸に秀でた家の者らしく、立派な文様が彫られた大剣を携えている。

「左様。危うく七聖騎士美男子の枠がテリオルに取られるところでしたよ」

くつくつと笑いながら軽口を叩くフェロセンを魔導匠オルタⅡエディフィスがたしなめる。

「オルトロス殿、殿下の御前ですよ」

「失礼しました。：：：しかし、第二級殺人（同じ身分間の殺人）で裁かれたアリアナに引き続き、反逆罪で貴族から償い人が出るとは」

オルタが負い目を感じるように、口をつぐむ。フェロセンのみならず、評議場にいる全員が、アリアナがエディフィス家の遠縁であることを知っている。

「オルトロス殿の軽口を聞くために集まったわけではありませぬぞ。エルフェン学院の処遇を決めなければ」

イシユカルドが話題を変えるように言った。

エルフェン学院は初代聖騎士、ヴァリアスⅡアーノルドが開いた学校だ。ヴァリアスは学問を一部の人間だけが享受するのを良しとせず、身分に関係なく、そして何者の干渉を受けない学舎を開いたのだ。時の教皇もヴ

アリアスの功績を鑑み、教会の関与を受けない学校を認めた。

「テリオルのような背教者をこれ以上生み出さないためにも、教団が介入すべきでは？」

カタストルの言葉に、ノルデイスが頷く。

「無論だ。ヴァリアス公の偉業に免じ、教団の介入を免れてきた結果がこれだ」

「今後は、エルフェン学院は教団の管轄下に置く。講義の内容は、事前に神官たちが確認するようにしよう」

教皇の宣言に異を唱える者はいなかった。ベネフィスは反論しなかったが、悔しさを堪えるように目をつぶっていた。

「学院長の処罰も免れまい」

フェロセンが、背もたれに寄りかかりながら言った。

「既に学院長の捕縛令を出しておいた。マクアダムズ殿が神託を聞いた後、裁きにかける予定だ」

罪人が有罪か無罪かは、教示によって決まる。有罪ならば、罪人の態度やその他の事情を考慮して審判官がどのような罰を課すか決める。

「まあ、神託を聞かずとも学院長の罪は明らかですが」

ミシエラはベネフィスを一瞥してから、他の聖騎士たちの顔を見渡した。

「アーノルド殿の御息を、皇女様御付きの教師から外すべきではありませんか？」

ベネフィスの次男——ニルヴァーシユアーノルドはテリオルと同じ母を持つ。兄が廃嫡された現在、学匠として教皇の長子、フィオレンティーナの専属教師を務めている。

「……私は何も言える立場ではありません」

ベネフィスは視線を落としたまま、それ以上何も言わない。

「ニルヴァーシユの義父である私が言うのもあれですが、彼はヴィクトリカ学院を出た秀才です。彼以上にフィオレンティーナ様の教師にふさわしい者はおりません」

ノルデイスの長女はニルヴァーシユに嫁いでいた。

教皇は頷いた。

「ニルヴァーシユは背教者の素質は見受けられない。専属教師にはニルヴァーシユを続投させる」

*

城門の脇に立った数人の門番が、流れ込む人々を検分している。悪いことをしたわけでもないのに、門番の脇を通り過ぎる時は、冷汗が浮かんだ。

無事に門をくぐると、リチャードが両腕を上げて伸びをした。

「やっとベッドで寝れるな」

「私はお風呂に入りたいわ」

アリアナの声も心なしか弾んでいる。

一行は、まず宿を探した。

五人一度に泊まれる部屋は無いため、二人部屋と一人部屋に泊まることになった。

指定された部屋は、二人部屋は二階、一人部屋は一階にあった。今後の予定を話し合うためにも、テリオル達はそのうちの一室に入った。

室内にはベッドが二つと、簡素なテーブルが一つ置いてあるだけだ。

「わーい、ベッドだあ！」

レフィーネは子供のようにはしゃぎながら、ベッドに腰かけた。

「さて、それじゃあ俺は雑貨屋で買い物してくるよ」

リチャードはテリオルに何かが入った小袋を見せた。

硬貨がぶつかる音がするから、おそらく財布だろう。

「これがパーティー全体の財布だ。全体に必要な物品はこの財布から出す。俺は売り買い当番なんだ。償い人になる前は商人をしていてね」

「それじゃあ腕の見せ所って訳か」

口数の少ないリチャードが商人だというのも意外だ。

「ああ」

「誰か一緒に行かなくて大丈夫か？」

デイケンズが口を挟んだ。

「少し買い物してくるだけだから大丈夫だろう」

そう言うとりチャードは部屋から出ていった。

レフィーネはベッドから立ち上がった。

「私は怪しい所がないか、情報収集してくるわ」

宿でじっとしているよりは、身体を動かしていたい気分だ。テリオルはレフィーネに声をかけた。

「私も同行しても良いかい？」

レフィーネは頷いた。

「もちろん」

「じゃあ、さっそく行こうか」

テリオルが扉に手をかけた時、デイケンズが声をよこした。

「情報収集には気をつける。償い人だと勘づかれたら、街にいられなくなるからな」

「わかった」

濡れ衣か本当に罪を犯したのか、事実はどうであれ、自分たちは罪人なのだ。

テリオルは隣を歩くレフィーネを横目で見た。

この娘も、何か罪を犯したのだろうか。人は見た目で判断するべきではないが、レティーナが罪人には思えない。

「とりあえず、情報収集と言ったら酒場ですよ」

「なるほど。人が集まるし、酒のおかげで皆口が軽くなっているからな」

テリオルも記憶が飛ぶほど酒を飲んだことがある。その翌日には、決まって女性たちから痛い視線を向けられるのだが、一体自分が何をしでかしているのか、恐ろしくて確かめたことは無い。

「そういえば、剣術は誰から教わったんだい？」

「私の実家、酒場を営んでいて。酔っ払いから身を守るように、と剣術を教えてくれたお客さんがいたんです」

男であるテリオルが想像する以上に、苦勞もしてきただろう。確かに、自分の身は守れるようになっていた方が良いに違いない。

「そうか。良いお客さんだね」

ふと、テリオルは昨夜の夕餉を思い出した。テリオルが加入した初日から保存食ばかり食べていたが、昨夜は、もうすぐ街に入れるため、レフィーネが夕餉を作ってくれたのだ。牢に入れられて以降、初めて美味しいと思える食事だった。

「でも、そうか。実家が酒場か……。どうりで、レフィーネの料理は美味しい訳だ」

レフィーネは、ぱあっと顔を輝かせた。さっぱりとした、明るい笑みだ。

「そう言ってくれると嬉しいですよ」

周囲からは物買いをする人の声や、何やら楽し気にお喋りに花を咲かせる婦人たちの声が聞こえてくる。すぐに酒場も見つかるだろう。

「あの人たち、剣持ってるよ」

「本当だ。あの旅人さんたち、強そうじゃない？ 声かけてみようよ」

何やら、街の子供たちがテリオルたちのことを話しているらしい。テリオルは立ち止まった。

「ねえねえ、お兄ちゃんたち」

テリオルは微笑んだ。子供のあどけなさが、愛らしかった。

テリオルはしゃがんで、子供と視線を合わせた。

「どうしたんだい？」

「お兄ちゃん達って旅人さん？」

「強いー？」

テリオルはレフィーネの顔を見上げた。

「どうだろう……？」

レフィーネは苦笑いしながら答えた。

「あのね、私たちこれから肝試しに行くのー」

「古そうな屋敷なんだよ」

「俺の名前はね、フォルスト」

脈絡のない子供たちの話にも嫌な顔をせず、テリオルは頷いていた。

「そうなんだ」

フォルストと名乗った少年が元気よく両手をあげた。「危険そうだから、お兄ちゃんたちにもついてきてほしいんだ！」

「ん？」

テリオルは笑みを消した。

「まず、お父さんやお母さんには、屋敷に行こうとしている話をしたのか？」

「したよ！」

「危ないって言われた！ 誰か大人と行くとしても、中に入っちゃ駄目だって」

「ハイオクらしいよ」

「廃屋」の意味も分からない様子で子供が言った。

「そうか、それなら私たちがついていくにしても、中には行けないな」

「ええー」

「お兄ちゃんたち強そうなのにな？」

不満げな子供たちに、テリオルは優しく語り掛ける。

「お父さんたちは皆のことが心配なんだよ。私たちがって君たちを守る保証は無いし……」

「そうだよ。でもね」

レフィーネも膝を折って、子供たちと目線を合わせた。

「その屋敷の場所を教えてください」

レフィーネは、何となく子供たちが話す屋敷が気になった。

「俺たち案内してあげるよ！」

テリオルは人差し指を立てて、子供たちに念を押した。
「じゃあ、案内してくれるかな？ 皆、絶対に勝手な行

動をしないって約束できるかな？」

「わかったー！」

歩きながら、子供たちは各々実家が雑貨屋であることや、兄弟がいること等を口々にまくしたてた。他にも何か言っていたが、皆同時に話すから話の内容はさっぱり分からなかった。それでもテリオルは笑顔で相槌を打っていた。

「あそこのお屋敷だよ！」

喧騒が遠ざかり、街のはずれに来たところで、子供たちが前方を指さした。

代官の屋敷だろうか。

テリオルはレフィーネと目配せした。

レフィーネは膝を折ると、子供と目線を合わせた。

「案内してくれてありがとう」

「どういたしまして！」

「またねー！」

「今度は一緒に遊ぼうね！」

フォルストたちはきやあきやあと駆けていった。

子供たちが立ち去ると、テリオルは仲間と顔を見合わせた。

「少しあの屋敷を見ていこうか」

「はい」

テリオルは扉を叩いたが、しばらく待っても誰も出て

くる気配がない。

扉に手をかけると、鍵はかかっているらしく、簡単に開いた。テリオルはレフイーネと顔を見合わせると、屋敷の中へ入った。

昼間だというのに、日当たりが悪いせいか屋敷の中は薄暗い。

「誰かいませんか？」

レフイーネの問いに答える者はいない。

「……本当に誰もいないみたいだな」

「とりあえず近くの部屋に行ってみましょう」

テリオルは右側にある部屋に足を踏み入れた。

一瞬、成人と同じくらい大きい植物が生えているのかと思った。

よく見ると、植物は動いている。――あれは魔物だ。五体はいる。テリオルたちが植物だと見間違えていたのは一瞬のことだったが、その間に魔物の一体が、テリオルたちに気づき襲い掛かってきた。

テリオルとレフイーネは剣を取り出した。

テリオルは魔物を切り裂いた直後、詠唱した。

「氷よ、凍えろ」

途端に魔物が氷に包まれる。レフイーネも軽やかな動きで敵の攻撃を避けながら、剣を振るっている。

すぐに部屋の中の魔物は片付いた。

剣を少し拭ってから、テリオルは仲間に声をかけた。

「無事かい？」

「はい」

レフイーネも剣を鞘にしまった。負傷はしていないようだ。

探索を中止して、テリオルたちは仲間と合流するべく宿に戻った。

「アリアナさんがいないか、部屋に戻ってみますね」

「ああ」

しかし、レフイーネが二階へ向かった直後、アリアナが宿に入ってくるのが見えた。

「アリアナ、リチャードとディケンズがどこにいるか知っているかい？」

「ディケンズなら宿にいるはずですけど、リチャードはまだ見てませんね」

「そうか。皆に話したいことがあるんだ。リチャードも戻ってきたら私の部屋に集合してくれ」

部屋に戻ろうとするテリオルを、アリアナが止めた。「テリオルさん、お一ついかが？ 昨日見張り番をしている時に作ったんです」

「君が？」

テリオルはアリアナと差し出された焼き菓子とを交互に見た。貴族であるアリアナが料理をするとは思えない。

「……料理は今の状況に置かれてからするようになった

のかい？」

「実は、ここに来る少し前からやっていたんです」

そこでアリアナは声を落とした。

「平民の女性は、自分の夫に料理をするものと聞いて、私もやってみたいと思ったんです」

目の前にいる女性が、人妻であることを否応なしに気づかされる。アリアナは確か、ニルスト家の遠類と結婚したはずだ。きつと、夫に料理を作ったのだろう。

「美味しそうだね、いただきよ」

テリオルが料理に手を伸ばした直後、後ろから思い切り肩を掴まれた。

「死にてえのか……？」

「デイ、ディケنزズ……？」

信じられないものを見るような目をする仲間がいた。

「お前、アリアナの知り合いだったんだよな？ この死者製造料理のことを知らないのか！」

「死者製造料理……？」

ハツとしてテリオルは目を丸くする。

「まさか、毒が……？」

「そんな訳ないでしょ」

冷たく言い放った後、アリアナは不思議そうに首をかしげる。

「私は普通に料理をしているだけなんだけど……」

「ふざけるな！ お前が作った料理を食べて何人の仲間

があゝの世に逝きかけたと思っっているんだ！」

テリオルは眉をひそめながら、腕を組んだ。

「もしかして……アリアナの料理は不味いってことか？」

「はつきりと言いますね」

目を伏せるアリアナの顔が悲しげだ。

「私の手料理が口に合う方を探したいだけなのに……」

「変な探求心で仲間を殺すな」

アリアナは不敵な笑みを浮かべた。

「もしかしたらテリオルさんのお腹なら耐えられるんじゃないかしら？」

「え」

「待て、新しく加入したばかりの仲間を死なせるのか」

「止めるならアンタに食べさせるわよ」

ディケنزズは諦めたように目をつむる。

「……テリオル、お前のことは忘れない」

「え、待ってくれ諦めるの早くないか？」

「待ってください！」

凜とした声が聞こえてきたと思うと、レフィーネが階段から降りてきた。アリアナがいなかったため、一階に戻って来る途中だったのだろう。

「アリアナさん、テリオルさんを死なせるぐらいなら、私に料理をください！」

「レフイーネ!？」

テリオルは慌てて、健気な娘を止めた。

「待ってくれ、何も君が犠牲になる必要はない！」

「そうだぞ、こんな優男なんかのために若い命を散らすな」

「君は私を救いたいのか死なせたいのかどっちだい？」

何をもってディケنزは、テリオルのことを優男呼ばわりしたのだろう。——そうか、私の顔が良いからか。

「貴方たち、さつきから私のことを貶していることに気づいている？」

ふいにアリアナは今までに見たことがないくらい、清々しい笑みを浮かべた。

「もういいわ、とりあえずテリオルさんだけ召し上がれ」
言いかけたテリオルの口に、死者製造料理が詰め込まれた。一瞬のうちに不快感、苦み、何とも言えない食感、様々な情報が駆け巡ってきた。その直後、テリオルの意識は暗い闇へと落ちていった。

目を開けた時、テリオルは一瞬自分が置かれている状況が分からなかった。

「良かった！ 目が覚めたんですね」

「レフイーネ？」

顔を少し傾けると、安堵した表情のレフイーネの顔が

見えた。

「目が覚めたか」

ディケنزの顔を見た瞬間、死者製造料理の記憶が蘇ってきた。

「私は一体どれくらい気を失っていたんだい？」

「二刻くらいじゃないか？ もう日も沈みかけているが」「災難だったな」

いつの間にか宿に戻ってきていたりチャードも顔をのぞかせた。

「俺も初めてアリアナの料理を食べた時は一日以上気を失っていたよ」

「それでよく生還できたな……」

「ごめんなさいテリオルさん」

アリアナの顔を見た瞬間、思わず肩が強張ってしまった。死者製造料理の味を思い出しそうになるが、それを必死に押し殺す。

「アリアナ……もう二度と君の料理は食べないからな」
アリアナは肩を落とした。

「やっぱりテリオルさんでも駄目なんですわね」

「レフイーネから屋敷のことを聞いたよ」

話題を変えようとしたのか、リチャードが口を開いた。
ディケنزが心配そうな目を向ける。

「動けるか？ さっそくその屋敷に行きたいんだが」
テリオルは頷いた。

「夕餉は食べられそうにないが、戦う分には問題ないよ」
夕餉どころかしばらく固形物は食べられないような気がする。

「アリアナ、君の手料理は仲間じゃなくて魔物にやってくれ」

「大量に持っていきますね」

おそらく大量の魔物が消滅することだろう。

テリオルの魔法で燭台に火を灯しながら、屋敷の中を進んでいく。

屋敷中に魔物が蔓延っているようで、すぐに魔物と対峙することになった。

各々武器を構えた直後、奇声が響き渡った。

「ヒヤッハー！ ぶち殺してやるぜええええええ」

テリオルはあんぐりと口を開けて、リチャードを見つめた。リチャードは、今までに見たことがないほど生き生きとした笑顔を浮かべている。

「え、リチャード……？」

「アイツは、弓を構えると人が変わるんだ」

「大丈夫なのかい彼の精神状態は……？」

テリオルたちが話している間にもリチャードは「アヒヤヒヤヒヤ」と不気味な笑い声を上げながら矢を放ちまくっている。

殺人鬼の目など見たことがないが、おそらく今のリチ

ヤードのような目をしているのだろう。きっと、彼は人を殺めてしまったのだろう。それで償い人になったに違いない。

「分からない。どちらが本性なのかは謎だが、ああなくても人を射抜いたりはしないから安心しろ」

「本当に……？ 対人でも笑い声上げながら矢を放つんじゃないか？」

半狂乱のリチャードとアリアナの手料理のおかげで、屋敷の魔物はあつという間に壊滅状態だ。

屋敷は二階建てだった。二階の大きな扉に手をかけると、鍵がかかっていた。

ディケンスは眉をひそめた。

「ここは入れないな」

「俺がぶっ壊してやるよおおおおお」

リチャードはまだ半狂乱状態だ。

「リチャードさん、諦めて鍵を探した方が早いと思いますよ」

仕方なく、隣の部屋に足を踏み入れると、皆顔を強張らせた。

成人男性の二倍くらい大きさの魔物がいる。鳶のような触手を持ち、花卉には鋭い歯が覗いている。今までの魔物とは比べ物にならないほど、威圧するような雰囲気纏っている。

「こいつが親玉か！」

アリアナが料理を親玉に向かって投げた。

「これでも食べなさい！」

しかし、親玉はアリアナの料理を撥ね退けた。

「他の魔物よりも賢そうだな」

驚いている暇はない。テリオルは襲い掛かってきた触手を切り落とした。

「関係ねえ！ぶっ殺してやるよ！！」

リチャードが奇声を発しながら矢を放つ。気分が高揚しているせいか、リチャードの矢は、正確に魔物を射抜く。

「デイベインスレイブ！！」

屋内だというのに、魔物の頭上に暗雲が立ち込めると凄まじい閃光と共に、雷が魔物を貫く。魔物は硬直したようで、微動だにしない。

「弱点を突いたみたいだ！一気に畳みかけるぞ！」

「了解！」

「あひやひやひやひやひや」

デイクエンズとレフィーネが魔物に攻撃を叩きこむ。デイクエンズたちが二、三回ほど攻撃した直後、硬直していた魔物が雄叫びをあげた。

「硬直が切れた！」

近くで武器を振るっていた二人は素早く攻撃をかわしたが、剣のように鋭い魔物の蔦が、リチャードを襲った。

「ぐっ……！！」

「ヒール！」

すかさずアリアナは回復魔法を使う。たちまち傷は癒え、痛みが引いた。

「ありがとう！」

「シャイニングアロー！」

回復魔法を唱えるや否や、アリアナも光魔法を放った。光の矢が魔物に降り注ぐ。

魔物は苦し気に身を震わせながら、緑色の霧状の液体をまき散らした。近くで戦っていたレフィーネが液体を浴びてしまった。

「痛い！」

テリオルは、目を覆ったアリアナの手首をつかんだ。

「レフィーネこっちだ！」

魔物の攻撃が届かない壁際に着くと、レフィーネの耳元で言った。

「君はここにいたまえ」

テリオルの声が近くで聞こえた途端、レフィーネの心臓が跳ね上がった。状態異常になって動揺しているせいか、別の理由のせいなのか分からない。

痛みに耐え切れず、涙が次から次へと零れてくる。目を開けたくても開けられない。

「レスト！——大丈夫？」

まだ涙が零れるが、痛みは無くなった。涙の膜が張った瞳が、アリアナのぼやけた姿を映した。レフィーネは頷いた。

テリオルは魔法の射程内まで近寄ると詠唱した。

「フリージング！」

魔物の身体が氷に覆われる。フリージングは強力な高度魔法で、魔物だけでなく床にも氷が張った。テリオルの魔法は再び魔物の弱点を突いた。動きを緩めた隙を、テリオルは見逃さなかった。

「一斉攻撃だ！」

「加勢するぞ！」

ディケنزも魔物に深々と槍を突き刺した。

「ひゃーはっはっは！」

リチャードは未だに高笑いしながら凄まじい勢いで矢を放っている。

アリアナの手当てを受けたレフィーネも魔物に駆け寄る。

「私も！」

MPが少なくなってきたことを、テリオルは感覚で分かっていた。

攻撃の手を魔法から剣に切り替える。剣を振るいかさすと、魔物の身体を斬った。

魔物が再び霧状の液体を放出した。テリオルが後ろに

飛びのいた隙に、鳶が両腕に絡みついてきた。必死に振り払おうとするが、腕に食い込む鳶の力は強く、ビクともしない。

魔物が花弁をバツクリと開けると、鋭い牙が見えた。牙が襲い掛かってくるのと、ディケنزの槍が魔物の花——あるいは顔——を突き刺すのが同時だった。

魔物が悲鳴を上げながら、テリオルの拘束を解いた。

「助かったよ！」

ディケنزは微かに頷くと、続けざまに魔物の胴体に槍を突き刺した。

「死ねえええええええい」

リチャードの矢の猛攻も続く。

レフィーネは魔物の葉に上ると、跳躍して茎から根本まで剣で切り裂いた。

魔物は断末魔をあげ、霧状になって消滅した。

「終わった……？」

魔物は消滅すると、何やら鍵が床に落ちた。

憑き物が取れたようにリチャードは表情を消すと、矢をしまった。

「終わったな」

テリオルは化け物を見るような視線を仲間に向けた。恐怖のせいとか、身の震えが止まらない。

「私は、君が一番怖いよ。急に静かにならないでくれ、頼むから」

「大丈夫だテリオル。矢を放っているときの記憶は残っているし、そうだな……酔っぱらっているときと同じような状態になっていると考えるとくれれば大丈夫」

「何が大丈夫なんだい？」

話を続けようとして、テリオルは口をつぐんだ。そう、自分だって記憶をなくすほど酔っぱらった時は、何をしでかしているのかわからないではないか。

「そうか……酔っぱらっているなら仕方ないな」

リチャードは微笑んだ。

「分かってくれるか？」

妙に納得したような表情をしているテリオルを見て、ディケンズは、彼と酒を飲むのは止めようと決意していた。

レフィーネが鍵を拾う。

「さっそく鍵がかかった部屋に行ってみましょう」

リチャードが破壊しようとしていた扉は、親玉が落とすにいった鍵で開いた。

広い部屋を見渡すと、本棚や机が置かれている。

「ここは屋敷の主人の部屋かしら？」

レフィーネが首をかしげる。

テリオルは棚から本を取り出した。経典、国の歴史、植物に関する本など、学術書が中心だ。

「……これは日記か？」

テリオルは燭台を日記に近づけた。一ページ目に「フェンダー||テイルピッツ」と書かれている。

「テイルピッツ……？」

テリオルは眉をひそめた。

「この代官はシェズ家だったはずだが」

「テイルピッツなんて姓、聞いたことありませんね」

「そうだね。テイルピッツ家が代官だったとすると、少なくとも数十年前の日記ということになるかな」

テリオルは仲間も内容が分かるよう、日記の文章を音読した。内容は、家族のこと、街の様子のことなど他愛のないことが記されている。

「仲夏の月九日、二十時三十四分、あのことを教皇に申し立てして良いだろうか」

テリオルは思わず口をつぐんでしまった。まさか、いきなり教皇が出てくるとは。

レフィーネが眉を寄せる。

「いきなり不穏な文章が出てきましたね」

テリオルは音読を続ける。

「いや、国の一大事だ、今すぐにも書状を書こう」

ページをめくると、左側にしか文章が書かれておらず、右側は何も書かれていない。——日記の最後のページだ。

「仲夏の月十三日、七時二十分。何やら外が騒がしい。一体……」

「——続きは？」

リチャードに急かされ、テリオルは肩をすくめた。

「ここで終わっている。仲夏の月十三日に何か起こった
ようだね」

「教皇に書状を送ったのと何か関係があるのかしら？」
誰に言うでもなく、独り言のようにレフイーネが言っ
た。

「分からない。この日記だけでは、屋敷の主人に何が起
こったのか、教皇が関係しているのか……」

「主人は教皇宛に何を書いたんでしょう」

傍らからアリアナの声が聞こえて、テリオルは顔を向
けた。思いがけず、アリアナの顔が近くにあった。しか
し、テリオルはそのことについて何も思わなかったし、
それはアリアナも同じだった。

屋敷の主人の部屋を後にして、探索を続ける。

テリオルは隣を歩くアリアナに耳打ちした。

「アリアナ。皆は、君の出自を知っているのかい？」

「はい。初めて会った時に、ディケンス以外にも姓を名
乗りましたから」

この国で姓を名乗れるのは、上流階級だけだ。

「テリオルさんは姓を名乗っていませんけど、たぶん皆
貴族だって気づいてるでしょうね」

「……そうかな」

アリアナは可笑しそうに、口元を手で隠しながら声を
上げて笑った。

「そんな立派な服と言動を見て、誰が平民だと思うん
です？」

「……」

テリオルは何も言えなかった。

前を歩く二人の貴族を眺めながら、リチャードはディ
ケンスに尋ねた。

「テリオルも貴族だろうか？」

アリアナもテリオルも、まるで一本の棒が入っている
かのように背筋が真っ直ぐだ。幼い頃から躰けられてこ
なければ、あれ程姿勢が良くなることはないだろう。

「本人に聞いてみたらどうだ」

ディケンスは口が堅い。償い人の罪状や出身階級は神
官からの手紙で知っているらしいが、その手紙はすぐに
燃やしてしまおうし、他人の情報は絶対に人に漏らさない。
ディケンスはパーティの最年少だが、律儀な性格のお
かげか、仲間から信頼されている。

答えをはぐらかしながらも、それが意味のないことを
ディケンスは薄々感づいていた。アリアナが貴族だとい
うことを、リチャードたちも知っている。そして、テリ
オルはアリアナと知り合いだったとき。しかも、テリ
オルの着ている服は、上流階級でなければ手に入れられ
ないような仕立ての良いものだ。魔法も使える。姓を名
乗らずとも、自分は貴族だと言っているようなものだ。
レフイーネは、ディケンスとリチャードの会話に参加

できなかった。声は聞こえているのに、気が気でなくて、内容が入ってこないのだ。

初めて見た時から、テリオルを綺麗な男性だと思った。しかし、テリオルに対してそれ以上の感情は沸き上がってこなかった。

フォレストたちと話すとき——膝を折って子供たちと視線の高さを合わせる姿を見たあの瞬間から、テリオルに対する印象が変わった。もつと彼と話してみたい、彼のことを知りたい。この感情を抑えなければ、苦しむことが分かっている。だから自分の気持ちに向き合おうとしなかったのに。

先ほどの戦いで目を開けられなくなったレフィーネをすかさず壁際へ連れて行ってくれた時から、レフィーネは自分の感情に気づかないふりをするのができなくなった。

テリオルが他の女性と楽しそうに話しているのを見るのが辛い。レフィーネは視線を落とした。

「ん？」

ふいに、ディケンズは燭台を、廊下の時計に近づけた。

「この時計……針が無いな」

ディケンズの後ろから覗いたアリアナも口元に手を当てた。

「あら、本当」

テリオルも足を止めて時計を見た。

「古くて取れただけじゃないか？」

「そうではなさそう……？ 見たところ、劣化しているようには見えませんが」

レフィーネは首をかしげる。

「そういえば、さっき時計の針みたいなのが落ちているのを見たぞ」

来た道を引き返すと、リチャードの言うとおりに、時計の針らしきものを見つけた。

「何時に合わせればいいのかしら」

「日記の最後の時刻……屋敷の主人に何かが起こった時刻に合わせてみよう」

確か、七時二十分だったはずだ。

テリオルは時計のガラス戸を開けると、針を入れてみた。ピッタリだ。

「やっぱりこの時計の針だったのか」

針を七時二十分に合わせる。

途端に背後から仲間たちの驚嘆する声が聞こえてきた。テリオルが振り返ると、緑と白の光玉が宙を漂っているのが見えた。

「何だ、あれは！」

「何だ、あれは！」

アリアナは顔を引きつらせている。

「屋敷の主人の幽霊とか……？」

「まさか、そんな訳が……」

「デイケンズはそう言いながらも、目を丸くしている。」

「害は無さそうだな」

「リチャードは注意深く光玉を観察している。」

「害は無さそうだが、何か……楽しそうではないな」

「デイケンズが困ったように眉根を寄せた。」

「幽霊だとして、楽しんでいる幽霊なんて想像できないけどな」

「屋敷の主人だとして何を伝えたいか分からないな……」

「テリオルは鞆の中を漁る。」

「念のため何か置いていくか？　食べ物とか花とか」

「じゃあ私の手料理を」

「止める。崇られるぞ」

「言い争っているデイケンズとアリアナを横目に、レフイーネは携帯食を取り出した。」

「携帯食しか無いですけど……」

「他に置いていける物もなく、アリアナの手料理と比べたら何倍もマシだという結論になり、店で買った携帯食を置いていくことにした。」

「その後は素材を回収したり、魔物が全滅したのを確認してからテリオルたちは屋敷を後にした。」

翌日、テリオルは早朝に目が覚めた。

宿屋の寝具は今まで自分が使ってきたベッドと比べ物

にならないほど薄い物だったが、地べたよりずっとマシだった。おかげで昨夜は湯屋から帰るなり、泥のように眠ってしまった。

隣のベッドに視線を向けると、デイケンズは寝息を立てている。

二度寝する気にもなれずテリオルはデイケンズを起こさぬよう、そっとベッドから起き上がった。

道行く人もまばらで、市場もまだ開いていないようだ。少し歩いて宿に戻ろうと振り返ると、金髪を一つ縛りにした仲間が立っていた。

「レフイーネ」

レフイーネは慌てて言葉を継いだ。

「テリオルさんが外に行くのを見て、こんな朝早くから、どこ行くんだらうって思って後をつけちゃいました、すいません」

「テリオルはレフイーネの、普段とは違う縛り方をした髪を見つめた。少々髪がほつれている。」

「普段と同じ髪型に整える暇もないほど、急いで来たようだね」

「テリオルは近づくと、少し屈んでレフイーネの顔を覗き込んだ。」

「それほど私と二人きりで話したかったのかな？」

「揶揄うように言うと、レフイーネは笑いながら答えた。」

「そうですね」

レフィーネの表情からは、返答が冗談なのか本気なのか分からない。

テリオルは笑みを深めた。テリオルは女性との接し方が長けている。

「そうか、それは光栄だな」

先ほどから若い娘の心臓が、恐ろしいほど高鳴っていることをテリオルは知らない。

レフィーネはテリオルと肩を並べた。

「こんな朝早くにどこか行く予定だったんですか？」

「たまたま早く目が覚めてしまっただけ。少し外の空気を吸いたくなったんだ」

「じゃあ」

レフィーネは平静を装って言った。

「少し散歩でもしませんか？」

「いいよ」

テリオルは歩き始めた。

「でも、早めに戻ろう。仲間たちが心配するかもしれないからね」

「はい」

レフィーネは少しだけでも、テリオルと肩を並べて歩けることに喜びを感じていた。

「お兄ちゃん、お姉ちゃん」

声が出た方を見ると、フォルストが走ってくるのが見えた。

テリオルはしゃがんで、フォルストと視線を合わせた。

「やあ、フォルスト」

レフィーネも膝を折った。

「早いね」

「お姉ちゃんたちもね！」

それからフォルストは興奮気味に話し始めた。

「聞いてくれよ、例の屋敷幽霊が住んでいたんだ！」

「幽霊？」

レフィーネは困惑したような表情をした。

「どうしてそう思うの？」

「あのな、昨日男の大笑いする不気味な声が聞こえてきたらしいんだ！」

「……」

テリオルはレフィーネと顔を見合わせた。レフィーネも何とも言えない表情をしている。

「本当に危険そうだから、俺たち肝試しに行くの止めることにしたんだ」

テリオルは微笑んだ。

「そう。その方が良くないね」

「今日もどこか案内しよっか？」

レフィーネは首を振った。

「ありがとう。でもね、今日は大丈夫。私たち、今日旅立つんだ」

「えー、じゃあサヨナラだな」

テリオルは思わず屈託のない笑みを浮かべた。フォールストの残念そうな声がいじらしい。

「元気でな」

「うん！ お兄ちゃんたちもね」

走り去っていく子供の後姿を見ながら、テリオルは腕を組んだ。

「変な噂が立ってしまったな」

「でも、返ってフォールストが危険な目に遭わなくて良かったかも」

テリオルは苦笑した。

「そうだね」

レフィーネはテリオルの綺麗な横顔を見つめた。

この人の声をもっと聞きたい。この人の顔をずっと見ていたい。レフィーネは、この感情の名前を知っていた。

(続く)